

成簀堂文庫蔵本慶長勅板日本書紀に施された訓点について

杉 浦 克 己^{*1)}

はじめに

慶長勅板日本書紀は、後陽成天皇の勅により慶長四年、清原國賢の手でまとめられた日本書紀神代卷上下の古活字版であつて、日本書紀版本の嚆矢とされている。後に全三十巻の古活字版が慶長十五年に印行され、またこれに訓点を施し整版としたものが寛文九年に印行されている。これらは、周到な本文校訂と勅板の権威によって広く世に受け入れられる所となり、以後最も重要な日本書紀のテキストとしての地位を占めてきたのであつて、特に寛文九年版本は初版以降数度にわたつて再刷・再版が行われ、本文のみならず訓読の面に於いても、近・現代に至るまでいわゆる流布本の第一として用いられてきている。

これら一連の版本の基となった慶長四年古活字版は、もともとの印行もあまり多くはなかったようで、現代に於いては版本の中ではかなり稀覯のものとなっている。このうち徳富蘇峰の旧蔵書で現在お茶の水図書館に置かれている成簀堂文庫に蔵される一本は、数少ない善本の一であるが、巻上下全編にわたつて朱及び墨によるヲコト点及び仮名点による訓読の書き込みがある。本稿はこの成簀堂本に見える訓読の書き込みについて、その特色を明らかにし、日本書紀（特に神代卷）の訓読の変遷上の位置付けを試みようとするものである。

版本等の漢文本文に書き込まれた訓点について、それが訓読や解釈を考える上で重要な資料にな得るという点は、日本書紀については、夙に黒板勝美博士¹⁾が伴信友校本（寛文九年版本に書き入れ）等を例に挙げて指摘されているが、その後も林勉

*1) 放送大学助教授（人間の探究）

氏²⁾が三手文庫本(写本)に見える契沖の書き込みについての詳細なご論を明らかにされ、また私³⁾も架蔵の寛文九年版本の一に見える筆者不詳の書き込みについて、現存未確認の吉田凡舜写日本書紀の推定につながる旨を述べたことがある。本稿はこのような観点に立って、いわゆる書き込み本に見える訓点の訓読史を考える上での価値を明らかにしようとするものである。

書誌

己 成實堂文庫蔵本慶長勅板日本書紀神代卷上下(以下「本書」と呼ぶことがある)は、昭和三年に当時の蔵者である徳富蘇峰によって、東京神田の書肆一誠堂の創業二十五周年を記念して墨・朱二色による精巧な複製が刊行されている。本稿の以下の考察も専らこの複製により、なお不審の箇所については、原本をあたる形で進めたものである。

同複製本は発行者が一誠堂主人酒井宇吉、印刷が蘇峰の主宰する民友社、という形になっているが、複製刊行の経緯については、末尾に付された蘇峰自身の「複製縁起」にその大略が述べられ、酒井の懇請によって行われた複製刊行のいきさつがわかる。蘇峰はこれに先立つ大正十三年に、丹鶴叢書本日本書紀(神代卷上下二冊)を同じく民友社版として二色版で複製刊行しており、日本書紀特に神代巻に並々ならぬ関心を寄せていた

ことがわかり、この点は先の「複製縁起」の更に後に付された「日本書紀を読む」なる一文にも明らかである。

本書は美濃判袋綴、墨付卷上四十七丁、卷下四十四丁(國賢の跋文二面を含む)で、卷上内表紙見返しに「日本書紀／慶長己亥／季春新刊」の文字が子持界線に囲まれて大書され、複製本では更にその後に一葉遊紙があつて、「一誠堂／創業二十五／周年記念」の朱印が押されている。また同じく複製では卷下末葉の後に蘇峰の「慶長勅板『日本書紀』複製縁起」「日本書紀を読む」の二文が五丁にわたって複製本文部分と同じ紙質で洋活字によって記されており、裏表紙見返しに昭和三年の刊記が貼付されている。

本文は一面八行、一行十七文字詰めで、一書部分は二行細書ではなく本伝と同じ大きさの文字を用いている。訓注は本伝部分では二行細書するが一書部分では細書せず、これらの点は以後の寛文九年版本と同一であるが、一書部分を本伝部分より二文字下げているため(寛文九年版本及びそれ以降の諸版本は一字下げ)全体の割り付けは寛文九年版本とは一致しない。

卷上下共に朱によるヲコト点及び声点・区切り点、墨による片仮名点及び返読符が書き込まれており、複製ではこれらも含めて精巧に再現されている。慶長四年勅板本は古活字版であり、もともとは無点であるから、訓点の類は後に書き込まれたものであることは明らかであるが、その経緯を示す奥書や書き込み

の類はない。ただ、本書巻上第一丁表に「曼珠院」の印が右肩及び内題二行目下にあつて、伝来の経緯を示す手がかりとなっている。この点について蘇峰は「複製縁起」で、

且つ此の勅版には曼珠院圖書の印記あればその由来する所亦た知るべし。曼珠院は・・・(中略)・・・由緒最も高き寺院にして、本書は恐らくは後陽成天皇より、當時の法親王に賜はりしものならむ。その本書に記入せられたる朱批訓詁の如きも、何人の手になるやを詳にせざるも、亦た必ず據る所のものがあるであらう

と述べている。ただ、管見の限り曼珠院関係の資料によっても本書書き込みの由来に関して資するべき情報はなく、外部からこれを辿ることは現在までの所できなかった。

漢字本文

本稿は書き込まれた訓点についての考察を主とするものであつて、古活字による印刷漢字本文を詳細に検討することは考慮していないが、訓読と漢字本文は不可分の関係にあることも確かであり、漢字本文についてもその概略を見しておくことにする。本書の漢字本文は、他の諸伝本と比較した場合、後に整版と

して上梓された寛文九年版本に最も近く、大略において一致する。このことは一方では、弘安本(兼方本)、乾元本(兼夏本)等のいわゆる吉田本系統の代表的な諸伝本にも近いということであつて、本書の漢字本文は、これら吉田本系統の諸本において本文の不審箇所について校異として書き込まれた注記の類などを斟酌したものと考えることができる。

本書独自の誤植と思われる箇所は必ずしも多くはないが、該当の箇所については、例えば巻上三十二丁表七行(宝鏡開始章一書第三)に見える「女」字(おそらく前行の近傍箇所にある「女」字に引かれたものであらう。)では、墨による書き込みで「如」字の頭注記があつて、訓点を書込む際に本文についても顧慮していたことがうかがえる。

また、寛文九年版本で「波豆那」となっている箇所(巻上二十七丁裏二行右・宝鏡開始章本伝、「毀」字への訓注)は他の諸本では皆「波那豆」となっていて不審であるが、本書でも「波那豆」(巻上三十三丁表七行左)となっていて、寛文九年版本のそれは本書に由来するものではなく、整版の際の独自の誤刻であることがわかる。⁴⁾

訓点の概略

本書に施された訓点は、朱によるヲコト点・声点・区切り点・

熟合点・合点、墨による片仮名点・返読符が主である。これらの内朱点は、ヲコト点・区切り点は星点であるのに対し、声点は横点で訓注部分及び歌謡の万葉仮名表記の本文に施されている。墨の仮名点は同一箇所第二訓第三訓を併記することは卷上冒頭の一葉を除くとごく希であり、乾元本等に見える万葉仮名訓の併記もない。またごく少数ではあるが、本文の校異に關係すると思われる頭注が卷上に一箇所、卷下に二箇所各々墨で、また一書の章段番号を開始位置に「第一」「第二」のように朱で頭書した例が卷下天孫降臨章についてのみ見える。

己 墨点は書体・墨色から推しては全編にわたって一筆と考えらる。朱点については書き癖を表すほどに豊富な形態は看取できないが、筆跡は一定で、これも一筆と見てよいように思う。また、加点密度は上下両巻の全編にわたってほぼ均一で、加点の態度の一端をうかがうことができる。

杉 一瞥の限り、片仮名点は寛文九年版本のそれに近く、またヲコト点及び声点は、弘安本（兼方本）・乾元本（兼夏本）などいわゆる吉田本系統ののそれに近いように見え、これらのいづれかに依って施されたもののように思われるが、これは全体の加点数の上にも現れている。全体の加点状況を、単語を単位に他の諸伝本と比較すると、

△加点単語総数▽

	ヲコト点	片仮名点	両者併用
本書	四〇一七	一二二五三	なし
弘安本	六六九五	一〇一二五	二四一
乾元本	六四七一	一一〇八八	二七七
水戸本	六一八二	九四七七	二二〇
寛文版本		一九六六七	

のようであり、ヲコト点を先行の諸写本から、仮名点を寛文版九年本から、それぞれ別々に取捨しながら採ったと見ると首肯できる数ではある。
この点は実際の加点例を見るとさらに明らかなのであって、本書では、

古 (天地開闢章本伝・卷上一丁表三)

片仮名点 イニシヘニ

ヲコト点 ……に

凡 (天地開闢章本伝・卷上一丁裏二)

片仮名点 スヘテ

ヲコト点 ……て

一書 (天地開闢章一書第一・卷上一丁裏四 他)

片仮名点 アルフミニ

ヲコト点 ・の・に

等のようにヲコト点と片仮名点が重複して記されている箇所が多く見られ、また他の伝本で見える、

汝身 イマシガミニ (乾元本 大八洲生成章本伝)⁽⁵⁾

のような、ヲコト点と片仮名点を組み合わせた併用訓は左記の表にも示したように本書には見えず、

汝身 (本書 卷上五丁表一行)

片仮名点 イマシガミニ

ヲコト点 ・の・に

のように、ヲコト点と片仮名点のそれに重複して施されている点から推して、本書はヲコト点と片仮名点は別々の底本によって施されていないかと考えられるのである。また、朱の合点が本文漢字のみならず墨の片仮名訓の右肩に少数例ではあるが見えことから、加点の順序は墨訓が先、朱点が後と考えられる。

以上から本稿では、朱点と墨点が別々に施されたもの⁽⁶⁾と考

え、それぞれに分けて考察を試みることにした。

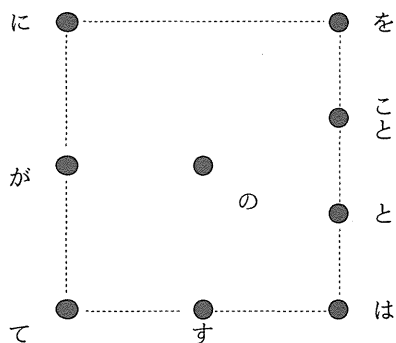
朱点

ヲコト点

本書朱点に見えるヲコト点は、星点のみであって、長点や鉤点は認められない。弘安本・乾元本など先行する日本書紀神代巻の諸本に見えるヲコト点と比較して、先ずこの点が大きく異なる。

星点は、

△成實堂文庫蔵本慶長勅板日本書紀 朱点ヲコト点図▽



のように帰納でき、いわゆる第四群点（紀伝点）であって、先行の日本書紀諸伝本のそれと同様である。

明らかな誤点と正しい例はなく、周到綿密に施されたものとうかがえる。他の先行諸伝本と比較した場合、加點箇所が全編にわたって完全に一致するものではなく、何らかの底本に依りつつもこれを転写するのではなく、独自の見識に依って注したものと見える。特に例えば卷上神代七世章等で神名が連続するような場合、「云・・・尊と」の形の「と」の読み添えを二柱め以降省略する伝本が多い中で、本書では各々について省略無しに注す場合が多い点等は、加點態度の一端を示すものと思われると共に、機械的に移点するのではなく、実際に読み下しつつ注されたものであろうことを想像せしめるものである。

さらに、先に述べたように本書書き込みのヲコト点は片仮名点と組み合わせ用いられたものではないために、自立語の類の例は、「スナハチ（す・・・）」「サラニ（・・・に）」等を除くと極端に少なくなっている。

日本書紀の諸伝本に見える訓読を比較してみると、諸中間の差異が比較的顕著に現れる傾向の強い項目があることについては既に幾度か述べたことがある。本書書き込みのヲコト点について、これに関係すると思われる事項としては、「而・之・于」字等のいわゆる助字の類の扱を挙げることができる。

助字の類に関わる例で、弘安本・乾元本等の先行諸本に見え

るヲコト点訓と本書書き込みのそれを比較してみると、差異が顕著な点としては「而」を「しかうして」と訓む場合を挙げることができる。「而」字について「て」のヲコト点は助詞「て」を表すものと「しかうして」の意で注されたものがあるが、本書に見えるヲコト点では「而」字への加點例は前者の助詞「て」のみで後者は見えず、前後関係から「しかうして」と訓むべきと思しい箇所は無点となっている（後述の墨による片仮名点で「シカウシテ」と訓める加點例はある）。また本書には「于」字に「に」等を注した例も見えず（片仮名訓で実訓に訓んだ例もない）、これも大きく異なっている点である。

これらを除くと、本書に見える朱のヲコト点は、ほぼ先行の吉田本系統の諸本と同様であるが、底本のままに移点したものではなく、加點者が一定の見識の下に取捨しながら注したものであって、その傾向は、ヲコト点は「すなはち」「さらに」「こと」等の一部の語を除いて専ら助詞・助動詞等に限って（いわゆる「テニヲハ」の類に限って）注したものであって、なるべくそれを綿密に施そうとしたものと考えることができるのである。

声点

本書には朱によって、六首の歌謡の全て（卷上一首、卷下五首）の各々全文、及び訓注の万葉仮名表記部分のうち卷上七十

箇所、卷下二十四箇所（部分加點も含む）に声点が付されている。声点は「上（左肩）」「平（右肩）」の二種であり、これは他の日本書紀諸伝本のそれと同様である。

この朱の声点はヲコト点のような星点ではなく横方向の長点が主である。弘安本（兼方本）及び乾元本（兼方本）をはじめとするいわゆる吉田本系統の諸伝本では、歌謡・訓注の万葉仮名部分に注された声点は一般に長点で、本書のそれも、これらに加點箇所、位置（壺）共によく一致する。⁸⁾

ただ本書の卷上には八箇所について星点及び圈点を用いたところがあつて、これは特に卷上の前半に比較的多い。

星点は、

美武須毗 上上上平（二丁裏六行・天地開闢章一書第四）
 烏等孤 平平平（四丁裏三行左・大八洲生成章本伝）
 烏等鳴 平平〇（四丁裏八行左・大八洲生成章本伝）

及び、一箇所の中に長点と星点を混用した例が、

美都波（十一丁裏六行・四神出生章一書第二）

「美」「都」字に各々長点で「上」

「波」字に星点で「上」

宇介能美裏磨（十八丁表三行、四神出生章一書第七）

「宇」「介」字に各々星点で「平」
 「拖」「磨」字に各々長点で「上」

多那須衛能余之岐羅毗（卷上三十四丁表八行、宝鏡開始

章一書第二）

「余」「之」字に各々星点で「平」

「岐」字に星点で「上」

「多」「那」字に各々長点で「平」

「須」「衛」「能」「羅」「毗」字各々に長点で「上」

の三箇所見える。これらのうち二例めの「宇」「介」字、三例めの「羅」字への加點は、一旦星点で打とうとしたものを長点に直したような逡巡の跡を見ることができ、この点は複製本でも看取できるが、原本にあたると一層明らかである。これらを長点と見ると明らかな星点は先の三例及び「美都波」の「波」字のみということになる。

圈点は、

碓馭廬嶋（四丁裏一行・大八洲生成章本伝）

「碓」字に星点で「平」

「馭」「廬」「嶋」字に各々圈点で「平」

の例のみに見えるが、この一箇所のみは訓注の万葉仮名部分で

はなく本文内の文字への加点点である。

声点の注記に星点と長点を両用し、更に一箇所混用した例を持つ伝本としては、鈴木豊氏によれば明徳本⁹⁾(阪本龍門文庫本)があるとのことであり、同本の加点点はここに挙げた本書の六例と良く重なるが完全には一致しない。また明徳本では「礮馭廬嶋」の箇所圏点を注す点も本書と同一であるが、明徳本のそれは墨点(同本の他の声点は朱)である点が疑問として残り、「礮」字も含め圏点であって本書とは一致しない。また、他の諸本からも管見の限り積極的にこの部分の星点を用いての証左は見出し得ず、本書の星点は不審とせざるを得ない。

己 浦 杉
この点を除けば、本書の万葉仮名部分に注された声点は、吉田本系統の何本かに依ったものと見ることが出来る。弘安本と乾元本では例えば、

阿摩能與佐圖羅(卷上四神出生章一書第三訓注)

弘安本 平平平上上上平

乾元本 平平平上上上〇

等のように、相互に加点点が一致しないものがあるが、この部分について本書は、

本書朱点 平平平上上上平(卷上十二丁表三行)

のように弘安本のそれに一致しており、明徳本も同様である。他の同様の箇所についても同じ傾向が見える。従って声点に限ってみると、弘安本あるいは明徳本のそれにより近いと言えることは確かであろう。

なお、弘安本・乾元本・明徳本にはここに挙げたような万葉仮名部分の他にも、同じ訓注の被注漢字について注された声点の例が見えるが本書には該当の例はない⁹⁾。従って、本書がこれらの、あるいはこれらに類する何本かを底本としているとしても、万葉仮名部分のみを選択的に採ったものということになる。

その他の朱点

以上の他に本書に見える朱点には熟合符及び区切り点がある。先ず前者の熟合符であるが、本書のそれには朱の他に墨によるものもある。一般に、熟合符は文字の当該熟語の漢字間の左側を繋ぐ縦線と中程を繋ぐ縦線を使い分け、音合・熟合を示したり、固有名のうち人名と地名を示し分けたりする例があるが、本書書き込みの朱点は全て中線で、このような使い分けはない。墨点ではこの左と中の使い分けが見えるが、どのような基準に拠ったものか判然としない例が多く、一部には同一箇所左と中の二線が共に注されるものもあって、複数の底本に拠ったもの

のかとも思わせる。なお、朱と墨の二種が共に注された例は更に多く、これは先にも述べたように、双方が別々に注されてであろうことの証左とも言える。

ただ、寛文九年版本及び弘安本・乾元本などと比較した場合、本書の熟合符の加點密度は墨・朱共かなり低く、何れの場合も書き込み者が選択して施したものであると考えざるを得ない。

また、区切り点は朱の星点のみが見えるが、これも熟合符同様あまり加點密度は高くない。区切り点については、当該漢字の「中下」と「左下」(希には「右下」も)を使い分け、近現代の漢字仮名交じり文での句点と読点のように区別して用いるものがいくつあつて、加點の系統考える上での手がかりとなる場合があるが、本書では「中下」点のみであつてこの区別は無く、この点から本書朱点の加點の経緯を考えることは難しいようである。また区切り点が注された箇所もその基準が一定せず、加點密度の低さとも相俟つて、区切り点同様、周到なものとはみなし難い。

片仮名点(墨点)

仮名字体

仮名字体は近世頃の片仮名の特色を持っていて、異体の仮名を併用することはほとんどない。ネは「子」を、「シ」は現代

の書体の二画目の点と三画目の右上はねを一筆に、「ヲ」の第一画は横線で二画が「フ」字形、など、洋活字が一般化する明治頃よりは以前の一般的な書体である。印象の上では、寛文九年版本の片仮名訓に見えるそれよりは幾分時代が降った、江戸時代中期以降の筆かとも思われるがあくまで推測の域を出ない。また本書片仮名訓には濁点(右上二点)が多く用いられており、濁音とおぼしい仮名についての濁点の付与密度は寛文九年版本のそれよりかなり高いように思われる。このことからしても、本書片仮名点が寛文九年版本よりかなり降るものではないか、と推測されるが、整版本の仮名訓に施された濁点は版それ自体の問題だけでなく摺刷の具合にも左右されることであり、本書のような筆書と単純に比較はできない。

合字・訓字

仮名点の内に見える合字には「シテ」「コト」「シメ」がある。このうち「シメ」は卷上四神出生章一書第十一(二十二丁裏二行)の「看」字への左訓「ミセシメタマフ」に見える一例のみであり、同箇所の右訓「ミシメタマフ」には合字が用いられていないことからしても特殊な例と見るべきであろう。寛文九年版本では合字として「シテ」「コト」の他に「トモ(ドモ)」が見える点が本書と異なっている。

訓字としては本書には「云(イフ)」「宣(ノタマフ)」「玉

「タマフ」「申(マウス)」が見えるが、このうち「玉」字の「タマフ」は「ノ玉フ(ノタマフ)」の形のみである。従って、本書の訓字は「イフ」及びその敬譲語のみということになる。これに対し寛文九年版本では「云」「宣」の他に「玉」字が「ノタマフ」以外にも補助動詞「タマフ」にも用いられる他、更に「寸(トキ)」が見え、また各々一例のみであるが「上(ノボル)」「心(ココロ)」がある。これを見ると本書が、訓字のうち、「イフ」及び類似の表現についてのみを選択的に採用していることがわかる。特にこれらは会話文に前後する「・・・トイフ」のような形に集中しており、本書片仮名点に見える訓字は、かなり限定的になっているということになる。

字音の表記

日本書紀の訓読は一般に訓読みのみが用いられ、字音読みがごく少ないのであるが、訓注部分の被注漢字についてはこれを音読みとする伝本があって、この音読みの有無及び字音の仮名表記が当該の訓点の系統を考える上で重要な資料になることについては、以前に拙考を何回か述べたことがある。特にこの中でも撥音韻尾の表記は諸本間の差異が顕著である。

本書仮名点には重なり数で三〇二文字の被注漢字について字音表記が見える。このうち撥音韻尾に関わる例は七八例あるが、これらの韻尾の表記は全て「ン」となっていて、これは寛文九

年版本のそれと同様である。また、「ン」表記と「ム」表記を思い分ける先行の吉田本系統の諸本、及び「ニ」表記や「ヌ」表記を併用する江戸時代後期以降の注釈書の類とも異なっており、本書仮名点は寛文九年版本に依ったものであろうことを推測させる。

しかし、撥音の表記以外の点では、例えば、

本書		寛文版 弘安本など	
貴	クキ	キ	クキ (巻上四神出生章本伝)
揮	クキ	キ	クキ (巻上四神出生章一書第七)

などのように、先行の吉田本系統のそれに一致するものも少数ではあるが見える。ただこれらは、積極的に寛文九年版本以外の何本かを第二の底本として用いたことの証左とまではみなし得ず、むしろ寛文九年版本に依りつつも、書き入れ者が独自に補訂を加えつつ、仮名点を注したものと考えるべきであろう。

語彙及び文法関連事項

以上に述べたように本書書き入れの仮名点は寛文九年版本に依ったものと思われ、使用される語彙や文法事項上の特色も良く一致する点が多いのであるが、完全に同一ではなく、いくつかの部分では異なる特色を持っている。

その中でも最も顕著なのは、本書仮名点には活用語の音便形のうち促音便についてこれを「ツ」で表記した例が見えないということである。寛文九年版本では、促音便形には「ツ」表記と無表記があり、後者は「以（モチ）」「因（ヨテ）」など比較的頻度の高い定型的な形に集中して見え、他の動詞類の連用形促音便＋テの形には「成（ナツテ）」「凝（コツテ）」「返（カヘツテ）」等のように「ツ」表記が用いられるのであるが、本書ではこれは見えず、

成（ナリテ） 卷上一丁表六（天地開闢章本伝）
凝（コリテ） 卷上四丁表八（神世七代章一書第三）

のような非音便形か、あるいは促音便の場合には、

返（カヘテ） 卷上四丁裏六（大八洲生成章本伝）

のように無表記となっていて、これは先行する吉田本系統諸本のそれと同様になっている。¹⁰³ このことは動詞連用形＋テの形以外にも見え、例えば「貴」字について、寛文九年版本が「タツトキ」とする所（卷上天地開闢章本伝）を本書仮名点¹⁰⁴では「タトキ」（卷上一丁裏一行右）とし、同箇所についての乾元本の片仮名点と同じ¹⁰⁵形になっている点などにも見える。

また、敬語の用いられ方の差異も、諸本間の訓読の差異を反映するものの一つであるが、例えば、

- ・ 卷上天地開闢章で天御中主尊のみを他神より高く扱うことはない。
- ・ 卷上大八洲生成章／四神出生章で、伊弉諾尊と伊弉冉尊の間に差異を付けない。
- ・ 卷上瑞珠盟約章で天照大神を素戔鳴尊より高く扱うことがある。
- ・ 卷下海宮遊行章で彦火火出見尊（山幸彦）を、特にその帰還後は火闌降命（海幸彦）より高く扱う。

等の点において寛文九年版本と同様の傾向を示している。

仮名遣

前項に述べたように、本書仮名点に見える語彙はほぼ寛文九年版本のそれに依っているものであるが、同一箇所になされた同一の訓について、その仮名遣が寛文版本のそれと異なる場合が散見する。

このうち濁点の有無による差異は、先にも述べたように両本の濁点の使用（及びその判読）の粗密に依存する部分があると思われるため措かざるを得ないが、それら以外にも、例えば、

搏 (卷上天地開闢章本伝)

寛文版本 アヲギ 卷上一丁表五行

本書仮名点 アフギ 卷上一丁表五行

のように、寛文九年版本のそれに見える誤りを訂する形になっているものも見え、特に仮名遣の面でこのような例が多い。その一部を示す(何れも「√」をはさんで上が寛文九年版本、下が本書片仮名訓)と、

ハ行に関するもの

イ√ヒ

葦牙 アシガイ√アシガヒ (卷上天地開闢章本伝)

耦 タグイ√タグヒ (神世七代章一書第三)

駆除 ハライ√ハラヒ (卷下天尊降臨章本伝)

所賜 タマイ√タマヒ (卷下天尊降臨章本伝)

など

エ√ヘ

漂蕩 タヽヨエ√タヽヨヘ (卷上天地開闢章本伝)

却 カエテ√カヘテ (卷上大八洲生成章本伝)

など

ヲ√ホ

五百 イヲ√イホ (卷上瑞珠盟約章 他)

など

ワ行√ア行に関するもの

獲 エ√エ (大八洲生成章本伝)

など

しかし、逆に本書の方が誤っている例もあるのであって、例えば、

オ√ヲ

大八洲 オホヤシマ√ヲホヤシマ

(卷上七丁表一行・大八洲生成章)

等の他、四つ仮名に関する、

教 アヂハイ√アジハヒ

(卷上六丁裏四・大八洲生成章一書第二)

これらのうち前者の例は「大」字に関わる訓であって、同様の例は他にも多く見える。ただし「大」字についてこれを「ヲホ」とした例は寛文九年版本にも見える。つまり同書は「オホ」と「ヲホ」を混用しているのであって、「ヲホ」のみが用いら

れている本書仮名訓はむしろ表記を統一しようとしたもののようにである。また後者では、先行する吉田本系統の諸本の多くが本書と同様の仮名遣を採っており、語自体が既に加点当時あまり一般的ではなかったであろうことを考え併せると、先行の諸本のそれも参考にした慎重な態度の現れと解することもできよう。

一方、

阿和奈伎 アワナギ▽アハナギ

(卷上三丁裏六・天地開闢章一書第二)

妍哉 アナニエヤ▽アナニヘヤ

(卷上六丁表七・大八洲生成章一書第二)

などは逆の例で、前者はそれ自体が訓注部分の万葉仮名表記であり、「和」字についての振仮名であるにも関わらず「ハ」としてしており、後者も後に当該本文について「阿那而慧夜」の訓注があるにも関わらず「ヘ」としてしまっている。

後者については近傍に類例があつて、

可愛 エ▽ヘ

(卷上六丁表八・大八洲生成章一書第二)

となっている。これも、同様に後の訓注「可愛此云哀」に従っていない訓であり、敢て訓注を顧慮していないのではないかとさえ思われる例である。しかし、総体としてはこのような誤例は希で、多くの場合は先に挙げたような寛文九年版本の仮名遣を統一的に正そうとした跡がうかがえる。

このように、本書仮名訓は、寛文九年版本のそれに依ったものではあろうが、そのままに移点したものではなく、何らかの他伝本、あるいは独自の見識によって斟酌を加えつつ注されたものであると考えられる。

返読記号及び返読法

返読記号には「レ」「一・・・・」「下・・・・上」が用いられており、この点も寛文九年版本と同様であつて、数字点を主とする中世頃までの諸伝本とは異なる。「レ」点については、中世頃までの例では、当該漢字間の中程の位置に注すものもあるが、本書では近・現代のそれと同様に左に寄せて記されている。返読法で諸本間の訓読の差異を顕著に示す傾向のある事項として、いわゆる再読文字の扱いや使役字を含む文の訓み方を挙げるができるが、これらについても寛文九年版本とほぼ同様の扱となっている。またこれに関連して、例えば「未」字について、

未之信（イツハリナラントオボシテ）

卷下六丁裏四行（天孫降臨章本伝）

のように、漢字本文を逐字的に読み下すのではなく、まとめて句単位に意を採った訓を充てている例も散見する。本書においてもこの部分では、三字の間に朱及び墨で熟合点が注されていて、三字一体で訓むべきことを併せて示している。

己 浦 克 杉
この部分については吉田本系統の諸本も寛文九年版本も同様の訓みとなっていて、本書加点が底本を斟酌しながら訓点を注したといっても、ある程度固定的に用いられてきた読みのある部分については先行書のそれに従おうとしていることを示しているものと受け取れる。

使役字の扱についても寛文九年版本と同様であって、

シテ 使 雉 往 ユイテ ミシム コレラ
レ 候 之

（卷下七丁裏六行・天孫降臨章一書第二）

のように、「誰々を」の部分から返読して当該字を実訓で「シテ」「マタシテ」等と読み、「何々させる」の部分に使役の意を表す「シム」等を訓みを添える形が用いられ、使役字を再読とする江戸時代の漢籍の類の版本一部に見える形や、あるいは、

「誰々を」の部分に「ヲシテ」を読み添え、「何々を」の部分から返読して当該字を「シム」等と訓む近・現代の漢文訓読とは異なっている。

これら以外の部分も含めて本書書き込みの墨点による訓読は返読法の上では大略寛文九年版本のそれと同様とみなすことができる。

まとめ

以上の考察を改めてまとめると、本書に見える訓点のうち、朱で施されたヲコト点及び声点等は、いわゆる吉田本系統の伝本、就中弘安本（兼方本）・乾元本（兼夏本）のそれに近く（さらに声点については明徳本（龍門文庫本）も）、おそらくこれに類する何本かを底本として注されたものであり、墨による片仮名点は仮名遣いや濁点の使用などから推して、吉田本系統の諸写本よりはむしろ寛文九年版のそれに類似する点が多く、おそらくこれを底本として、同本のそれに独自の見識による補訂を加えつつ注されたものであろうと考えられる。従って加点の時期は、寛文九年を遡るものではないことは明らかであるが、もう少し降って、江戸時代中期あるいは後期と考えるのが最も穏当のように思われる。

本書に見える訓読は、明らかに複数の伝本を斟酌しながら注されたものである。このうち声点については底本のそれを忠実に移転したもののようであるが、ヲコト点については書き込み者の見識による取捨が行われ、それは専ら助詞・助動詞などのいわゆる「テニヲハ」を表すものとして注したようである。また片仮名訓についても仮名遣を統一し、合字や訓字を限定的に用いるなど、同様の補訂の後が見えるものであった。これらはヲコト点や返読符、仮名訓が当時どのようなものとして受取られ、訓読がどのように変化していったかを示すものと思われる。本書のような書き込みを持つ伝本は、日本書紀についても、本書以外にも数多く存している。私自身も各所の蔵書目録の類をたよりにそのいくつかを実見する機会に恵まれてきてはいるが、各々の持つ訓読や解釈の跡は多様で、今後、訓読の変遷を考える上での重要な資料たり得るとの思いを改めて感じている。さらに言えば、これまで書き込みを持つ版本は、版本それ自体としては書誌的には無記入のものに次ぐ位置しか占め得ないものとして扱われ、蔵書目録などにも漏れる場合があることも残念ながら事実のようである。従って、書紀の訓読や解釈の跡を追うための新た且つ豊富な資料として、これらの書き入れ諸本が果たす役割に期待したいと考える次第である。

なお、本稿を草するにあたり、お茶の水図書館の担当各位に資料の閲覧についてご高配を賜ったことを銘記し、改めて深謝

申し上げたい。

- (1) 黒板勝美 『撰進千二百年記念日本書紀古本輯影』(大正十二年)
- (2) 林 勉 「三手文庫本日本書紀について―本文に関する契沖本書入を中心にして―」『論集上代文学第十二冊』(昭和五十七年・笠間書院)、及び「三手文庫本日本書紀書入にみられる契沖の書紀訓読(1)―合符から返点へ―」『論集上代文学第十三冊』(昭和五十九年・笠間書院)
- (3) 杉浦克己 「朱筆書き入れ本寛文九年板日本書紀について」(東京都立第五商業高等学校『研修第二三号』・昭和五十九年)、及び『六種対照日本書紀神代卷和訓研究索引』(平成七年・武蔵野書院)
- (4) 寛文九年版本ではこの訓注と整合を取るためか、当該の本文被注漢字「毀」字にも「ハツナ」の振仮名が施されていて、前後が通じない。本書では言うまでもなく「ハナチ」の振仮名が墨で注されている。なお他の吉田本系統の諸本は「ハナチス」とサ変動詞を補った訓みになっている。この点から推すと本書の「ハナチ」は、これら吉田本系統の何本かに依ったのではなく、寛文九年版本のそれに依りながら、独自の考

えも加えつつ注したものとすることもできよう。

- (5) 天理図書館善本叢書1『古代史籍集』(昭和四十七年・八木書店)の影印本による。同書十九頁六行)

- (6) 本書の朱と墨の書き入れそのものが別筆である、と断定するものではない。また書き入れの時期が異なる、と断定するものでもない。依った所の底本が異なるであろうとの推定の上に立って、各々独自の観点から施された訓点であろうとの考えによるものである。

- (7) 前掲(三)の『六種対照日本書紀神代卷和訓研究索引』研究篇

- 己 杉 浦 克
(8) 弘安本・乾元本について前掲(三)の『六種対照日本書紀神代卷和訓研究索引』の索引篇作成のための基礎資料としたメモに基づいて本書の声点と比較した。

- (9) 鈴木豊 『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』(昭和六十三年・早稲田大学秋永研究室)

- (10) 寛文九年版本で促音便ツ表記となっている部分を、促音便無表記とするか非音便形とするかについては、先行する吉田本系統諸本の相互間に若干の差異が見えるようである。弘安本・乾元本・水戸本の三種の中では、乾元本と本書が最も良く一致するようであるが完全に同一ではなく、他の二本との差異もあまり大きくはない。

- (11) 本書漢字本文は寛文九年版本の「貴」字に対して「尊」字

の校異がある。

- (12) 弘安本では同箇所を「タフトキ」とウ音便形に訓んでいる。

A Study of *Kunten* in the *Keicho Chokuhan Nihonshoki*
in the *Seikido Bunko* Collection

Katsumi SUGIURA

ABSTRACT

The *Keicho Chokuhan Nihonshoki* is a printed text of the first two books of the *Nihonshoki* published in 1599 under the order of the Emperor Goyozei.

An edition of this text in the collection of the *Seikido Bunko* has *Kunten* (marks indicating how to render Chinese text into Japanese) added in the 18th century.

These *Kunten* use as their source of reference to hand-written copies of the *Nihonshoki* from the medieval period.

These indicate how, from the middle ages to the *Edo* Period, *Kunten* for the *Nihonshoki* were made more simplified and systematic especially with regard to *Kana* orthography and rules for *Wokototen*.